
あなたに願った僕の負け

海会曜海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに願った僕の負け

【Nコード】

N66760

【作者名】

海会曜海

【あらすじ】

非日常はあなたのすぐ傍にある。

男が出逢ったのは、人か、神か、それとも・・・。

非日常を信じている人間がどれほど居ようか。自分の置かれている状況に満足出来ず、何かの救いの手を待ち続け、しかしそんなものは決してないと疑いつつも知っている者に、この真実を知ってほしい。いや、真実ではない。信じている者にだけ、見える。非日常とはそういうものだ。そして私はこの真実を信じない。私には非日常も何かの救いの手も待つては居られないのだから。

風呂から上がった男の目の前には、見たこともない女の姿があった。男は一人暮らしだ。恋人も居ない。だから見たこともない女の前に驚かないわけがなかった。戸締りはしていた。人が入ってくる気配も音も男は感じなかった。

「どこから入ってきた。お前は誰だ」

男は聞いた。これを聞かないで何が始まる。

女は呆れた様子で男をじつと見ていた。姉が久しぶりに逢った弟の情けない姿を目撃したかのような視線であった。

「そんな事を聞いて、どうするのです。私はあなたの目の前に居る。それで良いではありませんか」

女は答えた。白く、長いワンピースを着ていた。髪は黒く、肩にかかる程度の長さであった。

「お前は誰だ」

男の手には受話器が握ってあった。もはや警察に渡した方が良い。そう判断しての行動である。

女は少し考えた。自分の短い髪の毛をクルクルと指で回した。これは女の癖なのだろう。

「私には名前がありません。ですから、人は私の事を様々な呼び名で呼びます。例えば、神とか」

女は笑った。それ以上に男は笑っていた。

女は願いを叶えてやろうと言った。しかし男は目の前の女を疑える冷静さを持っていた。男は知りたいたのだ。女が神と呼ばれている理由が。男はそう伝えたと女は、

「そのようなもの、ありませんわ」

と、返してきた。神が神である為の証拠など、あったところでどうするのです。女は言う。男は妙に安心した。もし、女にこれが神と呼ばれている証拠です。などと、見せられた時はどうすれば良いものか、考えてもいなかった。女は言った。

「私はあなたの願いを叶えられる。それこそが、私が人々から神と呼ばれる証拠。むろん、あなたが私を信じてくれればの話ですよ。私はどちらでも良いのですがね」

そう言われてしまえば、考えるしかない男であった。男には夢はない。叶えて欲しい願いなど、すぐには思い浮かばないのだ。

「願いを叶えるというのは、一方的なものなのか」

男は聞く。

「どういう意味ですか」

「その。あんたに願いを叶えてもらうには、俺だって何かしなくちゃならないとか」

女は即答した。

「そうですね。あなたからはあなたの寿命を頂きます」

男は驚かない。男は分かっていた。これは神との契約なのだ。

「ご安心ください。これはお互いが納得してからの契約となります。あなたの納得無しに、物事を進める程、私は卑怯者ではありませんわ」

女は男に3つの願いを用意して欲しいと言った。男には迷いはなかった。言うだけ言ってみよう。もし、寿命の全てを頂くなどと言われた時は断れば良い。男はそのつもりだった。

「願いを考えた」

「ええ、どうぞ。教えて下さい。それからあなたの寿命を請求しますわ」

男は静かに言った。

「まず、金が欲しい。俺に理由もなく毎年二千万円入るようにしてくれ」

「随分と謙虚なですね。見直しましたわ」

女が言う。男は、

「そりゃあ、もっと沢山金が欲しいさ。そしたら、多くの寿命を取られるのだろう。二千万もあれば、ある程度仕事もせずに暮らせるからな」

女は少し関心した。もっとも、女には少し、人間を小馬鹿にする癖もあった。

「残り2つですが、どう致します」

男は言う。

「次は言語力が欲しい」

「言語力、ですか」

女は驚いた。そのようなものをねだられたことは過去一度もない。

「いろんな国へ行ってみたくてね。俺は馬鹿だから英語も出来ない。だから言語力さ。通訳なしで、多くの国を一人で行きたい」

そうですか。女はそう言うと、男は最後の願いを言った。

「最後はな、出逢いが欲しい」

女はさらに驚いた。出逢いで良いものなのか、男に聞いた。

「出逢いで良い。確かに前に女が欲しいなんて言ったら、お前はすんなりと女を出してくれるのだろう。だがな、女だけは、自分で自分の女にしたい。そうじゃないと意味がないんだよ」

男には何か過去があるらしいが、女は聞くのをやめた。

「私が今まで出逢った人間には恋人が欲しいと言う人間が沢山いました。が、あなたがそうじゃないですね。出逢い、で良いのですね」

女は念を押して聞く。

「出逢いで結構だ。昔から俺には出逢いがなかった。だから出逢いだけはあんたに願おう。その先は自分で何とかするさ」

男は何もない横を見た。その先に男にだけしか見えない何かがあるのだと、女は思うしかなかった。

「私が人間だったら、あなたに惚れたかもしれませんね。良かったわ、私は私で」

女が笑った。男も笑うしかなかった。

「さて、あなたの願いですが、金、言語力、出逢い。この3つで良いですね」

女は男を見つめたまま言う。男は、

「ああ、それで大丈夫だ。そして俺の寿命だが、お前はどれくらい欲しいんだ」

「ええ、あなたの寿命ですが」

女は考えた。

「この3つの願いだと、あなたの寿命1年分頂く事で叶えられますよ」

随分と安いものだと、男は笑った。

「寿命1年が安いものだと思うのは人それぞれですわ」

「あんたはどう思う」

男が聞いた。

「どうでしょうね。私にも実際は良く分かりませんわ」

そうかい、っと男は答えた。男は愉快で仕方がないのだ。

「契約は成立、でよろしいですか。今ならまだやめられますが」

女が最後の確認をした。男に迷いはなかった。

「良いだろう。契約は成立だ。あんたは神だな。俺が認める」

女は笑う。

「それでは、契約ありがとうございます。あなたの寿命を1年分、頂きますわ」

そう言って女が男を抱き寄せた。その力は弱く、しかし、しっかり

と男を抱きしめていた。男は急な行動に驚いたが、これから訪れるであろう自分の輝かしい未来で頭がいっぱいであった。そして男は目をつぶった。女はすっかり1年分、男の寿命を取ることに成功したのであった。女が男を離すと、男はそのまま床に倒れた。女は男の死を確認すると、ある女の事を思い浮かべて言った。

「あなたの願い、叶えましたわ」

（後書き）

初めて小説？を書きました。

自分で読んでも呆れる文章だらけですが、

第三者の感想と意見が聞きたいです。

最後のオチが分からない人は言うて下さいね。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6676o/>

あなたに願った僕の負け

2010年11月2日22時04分発行